韓国 済州特別自治島との

作品譲渡譲受協約締結式

皆さんおはようございます。済州特別自治島の環境政策担当コ・ヨンチョルです。本日、バードハウスの作品譲渡譲受協約及び専門家セミナーにご参席下さいまして、ありがとうございます。この行事の順序について簡単に申し上げます。まず、参加者のご紹介をし、済州特別自治島知事と日本のバードハウスプロジェクト間の作品の譲渡譲受協約締結をした後に記念撮影をします。その後に専門家セミナーを行いたいと思います。

では、只今からバードハウス作品譲渡譲受協約締結及び専門家セミナーを行います。まず、国民の儀礼は省略致します。バードハウス作品の寄贈の譲渡譲受の協約式に先立ちまして、この事業の推進の経緯について簡単にご説明致します。

まず、バードハウスというのは、野生鳥類と自然を愛する人の住居空間である人工の鳥の巣、人と鳥のための小さな鳥の巣というイメージを持っており、人類の住居である地球環境を象徴するものです。そして、バードハウスプロジェクトというのは、地球の環境改善のための環境デザインの運動の一つであり、世界の有名な建築家をはじめとし、科学者やデザイナーにバードハウスの作品の制作を依頼し、その作品を展示するプロジェクトです。これまで 1993 年から 2008 年までに 8 回に渡って作品の制作、そして展示をしてきました。今年の 4 月 28 日にバードハウスプロジェクトの創始者であられる芳野大樹会長の方から済州島にバードハウスプロジェクトの作品の寄贈そして事業の持続的な運営と支援について提案があり、我が島では、その提案についてデザイナーや建築家、文化、芸術関係の専門家やそして弁護士などの法律諮問も受けた結果、島でこの事業を進めていくのが望ましいという結論に至りました。そしてこの内容について日本のバードハウスプロジェクト側と協議し、本日、作品の譲渡譲受締結を持つに至りました。

説明を終えまして、この行事に参加された方をご紹介致します。まず、済州特別自治島の政務副知事のキン・バンウンです。日本から参加された方々をご紹介致します。バードハウスの創始者であり、非営利法人のバードハウスプロジェクトの芳野大樹会長です。そして、竹中友美先生、永井良先生、櫻井真理先生、服部均史先生が参加されております。ご紹介致します。次は、芳野先生の方から立ち上がってご挨拶お願い致します。ありがとうございます。次は韓国側の参加者をご紹介致します。まず、セミナーの討論の座長をつとめられます済州島文化芸術財団のパク・ギョンウン知事です。デザイナーの、チョン・ジョンチョル作家です。ホンイク大学のチェ・ジョンソック教授です。コウリョウ大学のイン・チホ教授です。チョンナム大学のコン・ヨンドック教授です。済州特別自治島の環境保全局長のキム・ヤンボです。

では、バードハウス作品の譲渡譲受協約締約式を取り行います。この協約はオニリョン済州特別自治島を代表致しましてキン・バンウン副知事と芳野会長との間で行いたいと思います。では、壇上の方へお願い致します。協約書の朗読は省略致します。この内容には作品の寄贈に関する事項と著作権、そして事業の設置、事業運用に関する内容が

含まれております。署名し一部ずつ保管することに致します。

今日参加された方達との記念撮影を行いますので、壇上の方へお上がり下さい。参加者の紹介で、遅れて到着されましたデザイナーのパク・ソンウンです。締約式は終えましたけれどもセミナーまでご参加をお願い致します。今日、私の日程がソウルのプレスセンターで済州島の経済を求めるというセミナーがありまして、私は最後まで皆様と共に時間を過ごすことはできませんけれども、芳野会長にその点は申し訳なく思います。ご了承お願い致します。済州島の立場からは、とても有名なデザイナー、建築家、科学者の方々がアイデアを出して下さいまして、済州島の環境にあう作品を作る、ということで、済州島の環境に適応したデザインであるということを考えております。未来の世代に役に立つ素晴らしい作品になると思っております。このセミナーを通してさらに発展した内容を模索することができるように願いたいと思います。今日のセミナー、最後までご協力お願い致します。パク先生よろしくお願い致します。ありがとうございました。では、お先に失礼致します。では少し休憩を致しまして専門化セミナーを行いたいと思います。しばらく休憩致します。

キン・バンウン副知事と芳野代表

専門家セミナー

パク・ギョンウン理事長が主催されてセミナーを行います。

パク・ギョンウン

パク・ギョンウン

「皆さん、おはようございます。パク・ギョンウンです。締約式が終わりまして専門家セミナーに移りますが、芳野大樹先生が 10 時から 15 分間、バードハウスに関する発表をされ、その次に韓国側のコン・ヨンドック教授が 15 分発表され、その次にデザイナーのチョン・ジョンチョル作家が 15 分間発表し、45 分から 10 分間休憩した後に討論をし、12 時 30 分には終わりたいと思います。特別に座長としてすることはありませんけれども、本日は意味のあるこの場所だと思います。

バードハウスというのは私も雑誌などで見たことはあったんですけれども、この討論会の座長までになってしまって、少し当惑していますけれども、鳥の巣を象徴する全世界的なプロジェクトである、そしてそれを済州島に迎えるということでとても意義のある時間だと思います。また新しく始めるオニリョン、環境との共存というテーマの中でこのプロジェクトを行うということで、とても意味が深いと思います。これに関して専門家がバードハウスというプロジェクトが何かということについてそれぞれの立場で見解を発表して下さいます。そして地球環境の改善のために努力してこられたこの事業に対する理解を深め、今後済州島でどのようにこれを継承していくかということで共に考える場所にしていきたいと思います。では最初に芳野大樹先生の方から 15 分間発表をお願い致します。拍手をお願いします。」

芳野大樹

「パク先生ありがとうございました。本日を持ちましてバードハウスプロジェクトは済州特別自治島との譲渡譲受について調印を無事終了することができました。本当にありがとうございました。本日より済州特別自治島を中心に共同で進めることになりまして、知事、それから副知事はじめ、局長様、それから、ご協力、ご指導頂いた皆様に本当に心

芳野大樹

から厚く御礼申し上げます。またご来場頂きました皆様にも厚く重ねて御礼申し上げたいと思います。

今回バードハウスプロジェクトと韓国の済州島と一緒になって活動することになりました経緯を簡単にお話したいと思います。私達人類は今、地球を取り巻く環境問題に直面しております。その環境問題に対し、どう対応していけばいいのか、また自分達の未来をどのように描いていけばいいのか、国家レベルではもちろんのことなのですが、個人レベルでも考えていかなければいけないと思います。国はもちろんのこと、民族や宗教、地域、それから歴史的な脅威、さらには老若男女という垣根を越えまして考えていかなければならない大変大きな問題でございます。

私達が抱える問題に対し、人間が鳥の為に作った最も小さな住空間、バードハウス。このバードハウスを通して考えることができるのではないだろうか、そんな思いを持ちまして、バードハウスプロジェクトは 1992 年以来、日本だけでなく世界で活動してまいりました。そして済州島は、2007 年 6 月に済州火山島と溶岩洞窟が、韓国で初めて、ユネスコの世界自然遺産として認定を受けました。もちろん、その認定された場所だけでなく済州島には豊かな自然環境が残っております。車の立ち入りなどを制限された公園もあり、その中に美術館を有するなど、文化はもちろん、メッセージを発信する拠点としての素晴らしい機能を持っています。バードハウスプロジェクトと韓国の豊かな自然が残る観光文化都市である済州島、この両者はそれぞれの姿、形は違っても、同じ着地点を目指しているのではないでしょうか。つまり、これから自然と人類がどのように共生していくのが望ましいのかを世界に発信し、世界の人達と共に考えていきたい、その思いは、同じなのです。それが今回一緒になって活動しようとする全ての出発点でございました。さらに申しますと、バードハウスプロジェクトには、世界のクリエイター達が作った様々な未来環境を提言する「バードハウス」という資産があります。そして済州島には、思いを世界に発信する「場」と「発信力」があります。自然との共生やその先の未来を考える為に、このバードハウスプロジェクトと済州島が気持ちを一つにし、一緒に手を取り合って行動することにより、環境問題を考える「きっかけ」が生まれます。その「きっかけ」から「希望」がまた生まれます。より大きな「希望」を世界に作り出すことができるのです。そしてそれがたくさん集まることで、世界がより良い世界へと進む力を生み出すことができるのではないでしょうか。今回考える「きっかけ」から、「具現化」へ向けて動き出す可能性が生まれます。私達は済州島と「きっかけ作り」のこの場を済州島から一緒になって発信していこうということを確認している次第でございます。そのバードハウスプロジェクトとはどんなものなのか、また、どのように地球を「デザイン」していくのか、そのことについて少しお話したいと思います。

まず、環境問題をお話ししていきますと、局長も大学の方で環境社会学を勉強なさっていらっしゃると聞きました。環境の社会と環境の産業と、この二つがございますが、この産業型の博覧会というのが 1951 年に初めてロンドンで開催されました。「生きとし生ける命を考えること」、これをテーマといたしまして、万博が始まりました。そして 1951 年、産業型の博覧会が開催されたわけですが、ガラス張りの建物を作り、そして鉄骨を初めて使った建物がこの万博会場で披露されました。そしてその鉄骨造りのパヴィリオンがあらゆる産業を生み出していきます。鉄骨造りのビルが初めてできたわけですが、そのビルから、鉄骨を通じて、サッシの窓枠もでき、それから、ビルもでき、それから橋も鉄骨でできるような時代に入っていきます。ということは、これをどんどん産業として生んでいくわけです。さらに進化していきますと、チタンでありますとか、いろんな素材まで発展してまいります。そうしていきますと、どんどんどんどんと環境が悪化の方へ進んでいくわけなのですが、社会が望むところは快適な空間作りですので、鉄骨から始まったものが、さらにガラス張りのビルまでできるような時代へどんどんどんどんと突入してまいります。

環境と人間のかかわりの変遷を見ていくのに蛮行博覧会は恰好なテーマと考えます

1951 年　ロンドン万博の「産業型博覧祭」として開催され、ロンドン郊外に世界最初の鉄骨・ガラス張りの建物がパックスにより設計されました。

コマーシャルの発生もこの時です。

デパート（百貨店）の誕生などで購買意欲を掻き立てたのもこの時です。、お客さんを呼び込めるということでできたのがこのデパート、百貨店なのです。それから、同じこの年に「コマーシャル」というのも初めてできましたそれから、「商品を暗いところから明るい日の元へ」という語源がコマーシャルなのですが、このコマーシャルを通じまして、どんどん

どんどん物を世界の人々に提供していく場として、コマーシャルを活用していくような時代に入ってまいります。それからショーウィンドーの誕生。お店の中へ入らなくても、外を通る人が購買意欲をそそられるようにショーウィンドーとして、道行く人がお店の中まで入らなくても見られる時代に入ってまいります。

1967年 「ライフスタイル型博覧祭」として新たなライフスタイルを提案し、産業が発展、新たな製品がどんどん発表され、さらに環境が悪化していく。1967年、物がどんどんできあがってきますと、ライフスタイルが変わってまいります。そしてライフスタイル博覧会として行われたのが1967年。そうしますと、最終的には環境は悪化へどんどん突き進みまして、行き着くところは、環境問題にたどりついたのです。

2000年 「いのち」を考える博覧祭ハノーバー万博で開催。環境問題が転換期になります。ここから環境問題が大きくピックアップされまして、博覧会自体も様変わりしてまいります。ということは、環境に対する考え方が大きな転換期を迎えまして、建物、それから、食べ物であったりというところまで、環境を中心とした物事の発想が生まれてまいります。このハノーバーの万博、テーマが「命」で「あなたもゴミ。私もゴミ。この博覧会もゴミになる。ゴミを考えるということは地球全体を考えること、ゴミを考えるということは、命を考えるということ。」なのです。「いのち（地球上の生命）」を考えること」がテーマとなります。

この命につきまして、簡単にお話しさせていただきます。まず、命はどこから来たのでしょうか。これには説が三つございまして、海から来たという起源説、土から来たという起源説、それから、宇宙から来たという起源説がございます。人間の生命を維持するための三要素と言いますと、それは、鉄と水と重力。このうちの、水を一つご紹介したいと思います。水を考える。地球上の総水量というのは三十七億年間、全く変わっておりません。地球上の液体の真水というのが、総水量の3%しかないのです。その3%のうちの0.01%に真水は過ぎないと。97%が海水でございまして、真水は3%。そのうちの99.9%が極地の氷なのです。北極と南極の氷が99.9%。我々が使っている真水はわずか3%でございます。人間が50年前には37億人の人口で、我々は地球上にいたわけですが、現在は70億人からの人間がこの地球上で生活している。水はわずか3%。全く37億年前と変わっておりません。そうすると何が起こるか。作物が採れなくなります。水の奪い合いになります。その水を奪い合う、結果的に戦争が起こります。水が足りないということは生命に大変な危機を生み出すわけでございまして、命を考えるということは、結果的には水を考えることにつながるということなのです。

私達バードハウスプロジェクトは生命を考える活動をしているわけですが、鳥を一つ例にとってみたいと思います。重力に反して飛行する為に、無駄を極限まで削ぎ落とした存在であるこの鳥。排泄が早い。物を食べますと、すぐ排泄してしまいます。余分な水分を体に残さない。敵が来た時にすっと飛び立って逃げられるように常に排泄をし、最小限のところで水を飲み、常に体を研ぎ澄まし、生命体を維持するようにしております。極限の状態に近い生命体が住む環境を考えるということが、この鳥の一番のところでございまして、ありとあらゆる生命を考えるということ。これから宇宙時代の発想を私達はしていかなければならないと思います。そして地球規模で物事を考えるということが大変大事になってまいります。

その地球規模で物事を考えるということにつきまして、少し、制作をお願いしているバードハウスがどういうものなのかということをご説明したいと思います。地球の直径が12,000㎞ございます。それから、人間が活動しているエベレストの最頂点が8,000m。海底で活動しているのが4,000m。これ1.2㎞になります。この12,000㎞の中で人間の生息圏、この1.2㎞。この中で環境を考えると言いますと大変大きすぎて理解できない。ですから、私達が考えましたのは、この12,000㎞を1.2mに考えてまいりましょう、と。そうしますと、人間の活動は、0.00012mになります。この1.2mのバードハウスのサイズを考えていただく各作家の方々が、この1.2mの中で環境問題を提言していただくというこの考え方を取り上げましてバードハウスプロジェクトは作家に依頼してまいりました。そして参加して頂いた方々が作品を作って頂いたわけなのですけれども、作品の説明をしようと思っていたのですが、時間が大変ございませんので、作品のご紹介は少し控えさせて頂きまして、もうちょっとわかりやすくバードハウスプロジェクトの考え方をお話ししたいと思います。

バードハウスの起源が、まず、山の木を人間がどんどん伐採してまいります。それは住宅を建てる為に木を伐採し、また紙パルプを作りというようなことで、木を伐採していきます。そうするとだんだん山が禿山になってまいります。禿山になったところに人間は次の世代の人達の為に植林をしてまいります。その植林した木がどんどん大きくなってきて新芽が出てきます。その新芽を虫が寄ってきて食べます。そうしますとその植林した木の生命が途中で途絶えてしまいますので、ヘリコプターで山の上から薬剤を投与していきます。そうしますと、木のところで巣を作って雛を産んでいた鳥の巣に上からどんどん薬剤がポタポタと落ちてくる。これを見た農夫が、「これは可哀そうだ」ということでその巣の上に屋根をかけてあげたわけです。これがバードハウスの由来でございまして、バードハウスプロジェクトが一番身近に感じたお話しはそこからいつもさせて頂いているんですが、これを人間のこととして置き換えてみますと、私達は土を掘って藁を立てて生活をしていました。そうしますと、雨が降ると藁から雨が漏ってきますから、瓦ができてきます。そして寒いので壁を作ります。さらに床が冷たいのでフローリングができます。快適環境にどんどん進化してまいりまして、最終的にはエアコンをつけて、暖房をつけて、気づいた時には環境問題の真只中におります。ですから私達は人間が作った最も小さな住空間、バードハウスにもどりまして、いっぺんそこから環境問題をもう一度考え直そうじゃないかというのがこのプロジェクトなのです。

皆さん、アジアですので、韓国でも日本でも文化はほぼ似たところがあると思うのですが、障子のお話をします。普段は障子をあけてお父さんとお母さんがお話をしている所で子供が庭で遊んだりしているわけなのですが、一旦夜になりますと障子を閉めます。障子を閉めた時に、子供はお父さんとお母さんが何を話しているのだろうかと思いまして、唾を少し指につけて、障子に穴を開けます。穴を開けてそこから覗き見ますと、お父さんとお母さんがお話ししているわけですが、同じ空間でありながら、昼間見た空間と、夜、その穴から覗き見る空間とは全く違うわけです。この、チョン、と開けた穴がバードハウスだと思っていただければ、わかりやすいのではないかな、と。同じ空間でありながら、覗いて見ると、全然違う空間になる。この視点を環境問題と置き換えて考えてみますと、大変わかりやすく、何をしていかなければならないか、ということが明快に見えてくるのではなかろうか、と。このプロジェクトは、大変済州島の考え方と合致しておりますので、一緒になり活動していけば、「きっかけ」から「具現化」に入っていくのではなかろうかと思います。是非この「きっかけ」の場を済州島から一緒になって発信していくように、私達共も精一杯頑張りますので、よろしくお願いしたいと思います。ありがとうございました。」

パク・ギョンウン

「ありがとうございました。バードハウスは、生命、生体に対するものであることをお話ししてくださいました。地球の環境を考える運動であるというふうに思いました。最後に障子に唾で穴を開けて、そこから見る世界、その態度が、バードハウスを通して地球を考える、環境を考えるものであるという核心的なお話だったと思います。スライドも全部見たかったのですけれども、時間の関係上、ここで終えたいと思います。

もう一度拍手をお願い致します。

では、コン・ヨンドック教授、発表をお願いいたします。」

コン・ヨンドック

「こんにちは。コン・ヨンドックです。今日の発表の前に、済州島と日本のバードハウスプロジェクトが環境の作品、バードハウスプロジェクトの寄贈式を持ちましたことをお祝いしたいと思います。そして、この場で私が発表できることを感謝致します。そして、この場を設けて下さいました関係者の方々にも感謝を申し上げます。

コン・ヨンドック
Young Duk KWEON

私が発表する内容は、大きく二つです。済州におけるバードハウスプロジェクトの意義が何であるのか、そして、推進している現況がどんなものか、ということに対してお話ししたいと思います。まず、バードハウスプロジェクトの意義は、私は三つにまとめました。一つは、目的の同一性です。そして、空間と認識の容易性。そして、三番目は済州から世界への拡張性、というふうにまとめてみました。上にあるのは、バードハウスプロジェクトの目的です。人と自然の共存を論じています。下は済州島の場合ですけれども、人と自然が共存する正常な済州を表現していますけれども、似た、

共通の意義をそこに見つけ出しました。次は、空間と認識の容易性です。地球の環境をどのように具現するか、という点で、人と自然の共存というのはとても広範囲で思想的でありますので、一般の人々には難しい点があります。その下のバードハウスのプロジェクトは、含蓄的で、具体的で可視的でありますので、市民、学生、子供達が理解しやすい、ということで意味があると思います。次は済州島から世界への拡張性ですけれども、これまでの日本のバードハウスプロジェクトは海外の有名な作家、各国の支部を通して、拡大していますけれども、済州島が世界に向かうために、済州島のブランドを、価値を向上させることのできるいい機会ではないかと思います。

次はバードハウスプロジェクトの現況と、推進の課題です。背景と推進についてお話しします。これは、日本のバードハウスプロジェクトは、海外の雑誌や有名なマスコミを通してスポットライトを浴びています。多くの活動をしてこられました。何故韓国の済州島に来たかということを考えてみると二つを挙げることができます。一つは、バードハウスプロジェクトはNPOのボランティアによって運用されています。次に、運営費というのは個人や企業の会費によって行われており、御覧のように、2011年の東日本大震災で企業や個人の後援がなくなり、経済的な困難を迎えました。今後済州島では、このプロジェクトを推進するにあたり、日本のバードハウスが拡大できなかったため、ボランティアによって推進することにより、推進の主体がはっきりせず、組織の活性化を制限する要因を克服するためには事務局の設置が必要だと私は思います。左の写真のように、木を移す時にとても用心深く移すわけですけれども、そうしないと、大きな木も枯れてしまいます。特にバードハウスプロジェクトのような長い歴史を持ったプロジェクトを済州島に移転する時に、その内容を深く知る必要があると思います。済州島と日本の緊密な協力を通して十分なノウハウを共有し、協力、発展のためのシステムを構築し、情報の交流をしていく必要があると思います。一般的にロードマップを作るのですけれども、ロードマップを見ると、活性化されないその理由として、ロードマップの作成を外部に依頼する場合などが多いですので、それは役に立たない場合があります。今後のロードマップは、事務局を中心として実際に運営する側で、その計画を立てるのが望ましいと思います。そのためのフォーラムを設けて、それを具体化していく必要があると思います。

これは海外の有名な作家の招待展を考えてみたものですけれども、日本でしたものを移転するわけですから、これまで参加してきた作家と連結することもその方法だと思いますし、国内の作家が一人もいませんので、済州島に来ることになったので、韓国内の有名な作家の作品を展示することのできる機会にもなればと思います。国内外の作家の参加が必要だと思いますし、学生などの公募展をする必要もあると思います。青少年のワークショップなども推進する必要があるのではないかと思います。

これは2008年にハンピョンのバードハウスのプロジェクトに参加したものですけれども、環境問題だけを論じるのではなくて、青少年に人間の本来の姿を伝達することができるバードハウスプロジェクトになれば、さらに発展するのではないかと考えます。以上で発表を終えます。ありがとうございました。」

パク・ギョンウン

「ありがとうございました。コン教授はバードハウスプロジェクトが何故済州島に来ることになったのかという背景と今後の推進のための方向性についてお話して下さいました。次は、チョン・ジョンチョル作家の発表をお願いいたします。」

チョン・ジョンチョル
Jong Cheol JEON

チョン・ジョンチョル

「作家・美術家のチョン・ジョンチョルです。今日私はバードハウスというコンセプトを持ってセミナーをしているわけですけれども、これを拡大していくということで、済州のアイデンティティーの元に我々がするべき文化、芸術という領域の中で、バードハウスのコンセプトを見出して、共に発展していければという思いから、発表したいと思います。

コッチャワルという済州の森ですけれども、そのアイデンティティーに基づいて我々ができることは何なのかというお話をしたいと思います。そして国内外の事例を持って説明を行います。コッチャワルのアイデンティティーの活用という

ことで、コッチャワルの生態的なデザイン、コッチャワルの活用的な側面から価値を高める方法は何か、バードハウスと同様に済州で文化芸術と結合した新しい環境運動には何があるか、そして関連した外国の事例を紹介したいと思います。このコンセプトは、コッチャワルは文化芸術の夢があるという抽象的なものですけれども、これまでコッチャワルには、森があったのですけれども、その森のアイデンティティーの上に私達の考えを加えたらどうか、ということです。環境と関連するとすれば、我々がこれをどのようにして解釈して接近するか、ということから、もう一つの価値を創出することができるのではないかということです。コッチャワルの環境的な資源を単純な森というものを傍観する観察者としての立場でとどまるのか、それとも新しいパラダイム、文化、人、という価値をそこに融合させて、済州が持っている済州の生命、平和という目的に到達することができるか、そのコンセプトになるのではないか、というふうに全体像を掴んでいました。その意図に基づき、コッチャワルの保全、活用を考えてみると、これまではコッチャワルの保存の状況は、先ほど話したように、運営・保存・観察、程度の限界性を持っていました。今後はそれに基づき、人間との関係をどのように有機的な関係にしていくのか、そこから意味を創出するかという考えをする必要があるということです。その活用的な側面から考えてみた時に、私が考えた簡単なものとして、人間との関係を通して、どのようにしてこれを解決するか、文明社会というのがとても産業社会であり、物質万能社会で荒廃した精神世界をそれを癒すための感性の世界を構築し、その精神性を回復するための活用の方向性が必要ではないか。これまでのモデルから、もう一つの価値を探し出す意味をバードハウスプロジェクトが追求しているものと共通する部分があるのではないかと思いました。具体的な接近、アプローチをするとバードハウスプロジェクトで提示した鳥の巣、鳥箱のような内容、この参考の資料を見ていただきますと、人間が作ったミニハウス、という家なのですけれども、バードハウスから創出されたデザインをここに拡大させてその価値を内在する方法もあるのではないかと思います。論じられている内容は類似しているので、具体的な内容は省略しますけれども、我々が考えるべき内容としては、コッチャワルの文化・芸術というコンテンツを持って、それをどのように活用するか、済州の場所との関連性を持って考えてみる時に、生態の観察レベルでとどまっています。その限界を乗り越えて、100%のうち、10%程度は、他の考えをそこに加えて、意味を探すことのできる、見つけることのできるプロセスを演出したらどうか、と思いました。先ほど述べたように、これまでは済州が産業的であり、発展的である、物質を中心としたものでありました。私は 4 年間ここで過ごしていますけれども、そう考えています。そのような一時的な目的は達成したかもしれません。さらに今、人間に焦点を合わせて、環境と合意することのできる精神性の回復、癒し、などのようなヒーリングの過程を通して、知的な人間の文化をも追求できるような方向性を持ったらどうかと思いました。現実的な問題点として、済州島のカンジョンの海軍基地が建設されているというような現実的な状況を見た時に、バードハウスプロジェクトが追求する目的と芸術家が見る済州島の未来像、生命と平和が共存する、文化と芸術が共存する、美しいファンタスティックな済州を夢見ているわけです。現実はそれとは異なります。

これはハイデルベルグという、ドイツで私が留学した都市で、とても美しい所でした。ドイツが世界大戦で全ての都市が荒廃したのですけれども、唯一攻撃を受けなかったところが、ハイデルベルグです。ここはとても美しく、文化と芸術があり、哲学があり、教育がある都市だったので、連合軍が、これが今後、人類の遺産として、破壊するべきではない、というふうにして残された都市です。同じように、済州が、バードハウスが追求する目的とそして芸術家達が目指す目的を持ってすれば、文化・芸術という高度の知的な人間の創造的な行為がそこで醸し出されて、カンジョンの海軍基地も生命と平和がある島として、今後、北東アジアの新しい衝突があったとしても、ハイデルベルグのような、この島だけは残そう、というような、そのような結果を創出することができればどれほどいいかという考えもしていました。バードハウスプロジェクトの説明は、先ほども説明がありましたので、その意味の目的は省略し、個人的な考えは、バードハウスの森の公園を作ったらどうかと思います。公園には池があれば鳥も飛んで来ますし、鳥が池にいる金魚をつまんで食べたりするのも見たのですけれども、それも自然の循環だと思います。美しい森に鳥の巣の家があり、大きな家には子供達が鳥のようにそこで遊ぶこともできます。ほとんど作品というのは室内に展示されるのですけれども、その横に、大きなギャラリーを作って、国内外の作家が多様な角度・視点からの鳥の巣を作って、それを観察する。展示する。観覧する。美しい森の公園に飛んでくる鳥を観察したり、その芸術品を観察したりすることのできる空間があればどうかと思います。それを拡大し、ドキュメンタリーのように鳥の巣と人間の根本的な生命性をそこに含めた鳥の巣の枠を超えて、映画や詩、文学などをそこから生み出すことができるようなバードハウス済州ドキュメンタリーというよ

うなものもそこから創出することができるのではないかと想像しました。ですから、様々、そこには複合的なその内容が必要ですけれども、それはまたその専門家に任せたいと思います。

これは鳥の巣を元にしたオブジェ的な内容です。

これはコッチャワルという活用。90%のコッチャワルに10%の人間の創造力を作ることによって今プロジェクトを進めています。森という基本的なアイデンティティーの上に、人間が創出する高度な知的な意図性を感じさせることによって、産業化されている精神世界を森という源泉的なエネルギーを持ったものからそれを癒し、その癒しと同時に人間が創出するもう一つの高度な創意的な意図性を同時にそこに含めることによって、巨視的な人間の生活の方向性を模索することもできるのではないかと思います。

これは森を利用した多様な例です。韓国のアニャンにある芸術公園の森のプロジェクトの内容です。

これはカリブ海の水中彫刻公園です。海の中にも森のような公園があります。

これは日本の札幌にある芸術の森です。日本の作家の作品です。我々の視線から見た森ではなくて、通路を作って上から眺める森という意図性を加えたものです。

これは鏡という媒体を通して空間の問題を扱ったものです。

これはドイツのインゼルホンブロイヒです。これは90%の森と10%の文化・芸術が融合した公園です。世界的な公園です。森という一時的な空間に内在する人間の感性的なアウラの中に、人間の意図的な建物、作品をそこに入れることによって作った森の美術館です。例えばこのように、作品の題名や署名などがなく、管理する警備の人もいません。森で遊んでいるうちにその作品に出合い、作品を人間が感性で判断する、そういう美術館です。誰かの説明が全部省略された公園です。作品がなく、ガラスを通して、ドアを通して見る外の世界が作品だという意図性を持って作られた建物です。これもインゼルホンブロイヒ美術館の中にあるものです。公園の最後にはおいしい食べ物、そして休憩できる空間があります。最後にはこのようなものに出合う意図的な計画もあります。

これは日本の直島です。島を戦略的な計画から芸術品に変えたプロジェクトです。済州島も参考に行ってきたと聞いています。

これは10年前に韓国のLHが公募した、鳥の巣を参考にした芸術品です。バードハウスと同じ脈絡ではないかと思って持ってきました。空間性とその中で生命が生まれ成長するその過程の断面を表した芸術品です。バードハウスと関連があると思って見つけてきました。

これはソキポにある公園で、池です。湖を人間の考えと重ね合わせてもう一つの芸術品とした例です。究極的にはバードハウスが求める意味と目的と同じように済州という基本のアイデンティティは森だと思いますので、森をただ見るという観察者のレベルではなくて、文化・芸術とバードハウスのコンセプトが重なり合って、もう一つの創造、もう一つの概念、そして精神世界の中のアイデンティティを探ることのできる機会を確保するのが、済州が今後未来に向かう自画像ではないかと思い、説明致しました。ありがとうございました。」

パク・ギョンウン

「設置（インスタレーション）作家であるチョン・ジョンチョル氏が、「済州の肺」と言われるコッチャワルを中心として、コッチャワルに芸術を加えるとか、森に価値を見出しながら、済州の自然を活用しようという提案型の発表でした。これまで3人の専門家が済州とバードハウスプロジェクトに関する発表をして下さいました。これから休憩し、11時か

ら総合的なパネル討論を行いたいと思います。ありがとうございました。」

パク・ギョンウン

「では、自由な討論の形式で行います。3 分程に要約発表して、案件に対する意見があれば、機会を与えるようにしたいと思います。これまでバードハウスの理解を促す発表と、済州とバードハウスをつなげる提案、コッチャワルをバードハウスの場所的な価値という観点から発表がありました。各自、ご自分の意見があると思いますので、特にコッチャワルは最近破壊されており、物議を醸しております。そこには細かい討議も必要だと思います。虚心坦懐に、制限を置きませんので、締結式などをしてお祝いの雰囲気なのですけれども、「私がこんな意見を出したら雰囲気を壊すかな」という風に思わずに、今後健全な方向に進めるためにも皆様の意見が必要だと思います。順序なく始めますけれども、最初に発言されたい方、お願い致します。」

コン・ヨンドック

「コン・ヨンドックです。チョン・ジョンチョル作家の発表を聞きながら、(コッチャワルに昨日行ってきました。環境的にいいところです。生態環境、そして、観察中心になっている所です。) 観察を超えて体験できる所にしたいという意見には同感します。そこに鳥の巣を作るとしたら、鳥箱を作りながら環境を考え、私が作った鳥の巣で鳥が卵を産むというような環境を観察することのできる体験や、そこでそれを掃除するようなボランティア活動も可能です。鳥の巣の形態を持った体験空間などがコッチャワルにできるとしたら、場所性、活用性という面からとてもいいモデルになるのではないかと思います。」

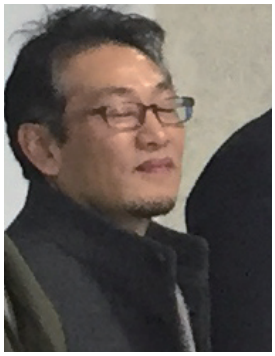
竹中友美

竹中友美

「バードハウスプロジェクトの竹中と申します。今、お三方のお話をお聞きしていて、バードハウスというのは、元々地球のビジョンを小さな形でというところが、バードハウスのコンセプトでした。先ほど、チョン・ジョンチョル作家のお話をお聞きしていると、それを公園に広げたもの、というのが、おそらくバードハウスプロジェクトのコンセプトと全く一緒で、公園の中で人間と自然が共生するという意味では、公園のプロジェクト自体もバードハウスプロジェクトをそのまま体現しているようなものだと感じました。おそらく済州島というのも火山からできていますので、そういう意味では、宇宙の起源である溶岩というものが大きくなったものが済州島だというふうに考えると、バードハウスが一番小さくて、その次に公園というものがバードハウスであり、済州島がバードハウスであるというふうにも考えられるので、まさにこの三つというのは非常につながっていて、公園の中で、あるいは、済州島の中で自然とバードハウスが、自然と人間が共生するというようなものが作れる、そういう形がまさにバードハウスだというふうに思います。そこに、コン・ヨンドック教授のお話の中にあった組織を作っていくとか、お金を入れていくという永続的なところができると、まさに世界に向けて発信ができるというような形ができると思うので、この済州島の中で、そういう形でうまく三つのものが連携しながらできていくと非常に嬉しいなと思いました。」

パク・ギョンウン

「コン・ヨンドック教授はチョン・ジョンチョル作家が提案したコッチャワルにバードハウスを設置するという案がとてもいいというお話でした。その意見に対しては皆様同意されますか。」


パク・ソンウン
Sun Hoo PARK

パク・ソンウン（デザイナー）

「私はパク・ソンウンです。このプロジェクトを推進した日本の方達に敬意を表します。質問したいのは、このプロジェクトが1993年から2008年まで続きましたが、それ以後は進行されていません。それは財政的な原因だと理解しています。

その他にも何か理由があって中断しているのでしょうか。もう一つは、実質的にこのプロジェクト自体が持っている意味はとてもレベルの高いものだと思いますが、作家が持っている名声以外に、このプロジェクトを通して実質的に社会的な価値を見出した結果があるのか、ブランディングされた要素とか作家の名声だけではなく、それ以外のこのプロジェクトを通して実質的に社会的な反映や、社会的な価値の成就があったのか、その二つを質問したいと思います。」

パク・ギョンウン

「パク・ソンウン（デザイナー）が、バードハウスプロジェクトが中断された理由が、財政的なことだけだったのか、そして、作家の名声を超えた社会的な反映があったのかということに対して芳野大樹先生からお答えをもらえますか。」

芳野大樹

「2008 年の開催の次が NASA の宇宙デザイナーによるバードハウス展を開催しました。これが第 8 回です。それから第 9 回に向けまして映画監督が作るバードハウスというものを手がけました。それでスタート致しまして、作品もお二方から頂きました。さらに宮崎駿さんとかいろんな方々にも声を掛けまして進んでいる途中に、東北大震災が日本に起こりまして、大変な被害を被りました。そのために各企業も自治体も東北の方に目が向きまして、いろんな活動がストップされました。その名残を受けまして我々ももちろんその中の一つなのですが、途中で中断した一番大きな要因です。そこから次のステップに入ろうという機会をうかがいながら、今日までずっと来ておりました。もちろん作品展とかエグジビジョンは折々で各自治体が開催して頂いたのですけれども、大きなプロジェクトとして第 9 回を開催することが現在までは至っていないというのが現状なのです。そこへ日本自体も経済的に大変苦しい時期にございまして、なかなか浮上していかないと。大変我々も悩んでいたところに済州島の方と話をさせて頂きました。ならば済州島に本部を置きまして、済州島から世界に発信していこうじゃないかと。そして、済州島自体がバードハウスなのだということを世界に発信し、考え方をメッセージし、哲学的な考え方ですので、文化度は大変アカデミックに上がっていくのではなかろうかということを持ちまして、済州島と一緒になってやっていこうということに決意したということなのです。

もう一つのご質問は、成果としてあるのかということでした。我々は皆が環境問題を考える「きっかけ」を作っていこうということ。そのきっかけづくりの場がバードハウスの作品展であったりしている。その作品を見て、小さな子供が NASA の人達がこんなことを考えているのだな、とか、研究者や学校の先生、教授の方々も見て、「環境に関して、あ、こういう考え方もあるのか」ときっかけとして大きな提供の一つになればいいのではなかろうかということで、世界の各地でバードハウス展を開催してまいりました。そしてそのことを具現化していこうじゃないかと。この作家の考え方をさらに具現化していこうということできっかけづくりの場を提供してきたわけでございます。今回もその場がこの済州島でございまして、済州島と共に具現化に向けてお互いにやっていきましょうと。きっかけの場だけでなく具現化へ向けていきましょうということで取り組みをさせて頂けたらなと思います。今までの成果と致しましては、小学校の低学年の方々に大阪で講演会を開催しました。600 名の生徒の前で NASA の宇宙ステーションを作っている方々に来て頂きました。NASA の建築家、いろんなしくみを考える方、そこで生命を維持する仕方を考える方、この 3 名の方に来て後援をして頂きました。小学校 1 年生の人から、「何故水星と呼ぶのですか」とか、「何故火星と呼ぶのですか」とか質問がありました。「水があるから水星と呼ぶのですよ」など大変わかりやすく NASA の方々が子供たちに真摯にお答えしているのを見ていますと、多分大きなきっかけを与えたのではなかろうかと我々は自負しております。小学校からも大変喜んで頂きました。華やかな場で開催することも一つでございますが、地道に小さな子供の時からもこういう場を提供し、きっかけづくりの場を進めていきたいなということでやっております。是非今後もお力添え頂いて、具現化に向けてよろしくお願いしたいと思います。」

パク・ギョンウン

「ありがとうございました。パク・ソンウン先生、答えになったでしょうか。」

パク・ソンウン

「ありがとうございました。私はこのプロジェクトに対して、最初から話すのはどうかと思うのですけれども、済州側

がこのプロジェクトを理解している理解度の違い。日本から提供されるコンセプトと済州側が理解している理解度の差があるのではないか、と思っています。その部分でそれは何なのかということに対する規定が必要なのではないでしょうか。私はこのプロジェクトを始めるにあたって確認する必要がある部分ではないかと思います。だからその部分を質問しました。このプロジェクトの定義が、私が見るからに、とてもコスモス的であり、ユニバース的である。とても凝縮された生命に対する疑問から出発していると思います。しかし、済州側の受け入れる態度はとても飛翔的であり、アート、デザイン、カルチャー、というような形態で理解していると思います。これが核心的に何か、という問題に対して、乖離している部分があると私は見ています。それが少し心配であり、日本側から提示されたプロジェクトの性格は科学的な研究、考察、環境問題、社会環境問題に対する喚起、警戒心を刺激するためのプロジェクトとしての性格がとても強いと思います。私達が受け入れる態度は、これまでは美的な調和、自然の共有のような立場からこれを受け入れているので、これが適切なのか、という疑問を私は持っています。その適切か、という疑問から、一つはコンセプト、アイデンティティを共有しているか、という部分を克服する必要があるのではないかと思っています。我々にとって、バードハウスプロジェクトがどのような必要性をもって出発しているのか、私達の必要性がとても浅く、作家の名声に依存するブランドに傾いているのではないか。それは私達の側の問題です。そして、日本側のコンセプトをもう一度見てみると、哲学的な問題提起がそこに含まれています。私達済州島側がそこまで成熟しているか、内的な準備がされているか、という部分では少し恥ずかしいと思います。このプロジェクトの根本的な内容を受け入れるにあたって、妥協する点がどこにあるのかという論議が必要なのではないかと私は今考えています。」

パク・ギョンウン

「パク・ソンウン教授が大変重要な点を提供してくださいました。このプロジェクトは生命や環境に対する警戒心を投げかけるという立場ですが、それを受け入れる済州島側はとてもそれを飛躍させている部分があるのではないでしょうか。ミニチュアの造形物を見るというような立場なのですが、チョン先生お願いします。」

チョン・ジョンチョル

「今始めたところなのに、今結論を出そうとするのは少し難しいのではないかと思います。私が言った話の中で、バードハウスの森を作ろうという部分とか、バードハウスタウンを作って、そこに行けば鳥に餌をやるとか、とても安らかな場所を提供するとか、その隣にギャラリーがあるとか、観察所があるとか、誰かがミニチュアの概念で何かを作った時に、そこに鳥が来て、観察場から鳥が何かを営んでいる状況を見るとか、という演出。ドキュメンタリーの概念で何かを作るとか。

私達が日本から持ってきたそれを踏襲するのは意味がないと思います。とてもいいコンセプトなのでそれを学んで、済州島の生態、アイデンティティを合わせて、それをどのようにといていくか、その過程が重要だと思います。単純な鳥の巣ではなくて、生命と平和という哲学的な何かであるとか、10 年前に鳥の巣で作った大きな設置美術(インスタレーション）がありますが、そこに向学的な概念を理解する過程であるとか。その過程が単純な制作というプロセスではなくて、多くの考えることができるきっかけになると思います。ですからそれを拡大していく。例えば鳥の巣がただのミニチュアではなくて、そこに鳥が関係するとか、子供達がそこで何かを営むとか、鳥を通して、同じ生命体としての人間が何をそこでできるかということを考える。単純なオブジェの概念ではなくて、映画や詩や写真、ドキュメンタリーのような大きな領域にそれを拡大していくということができる。

バードハウスを通して、生命性、平和、精神的な部分を。これまで人間がそれとは反対の生活をしてきた部分をバードハウスを通して何か垣間見ることができるような。私達が目指していく方向性を誘導することのできる、そういうプロジェクトとしての可能性を見出したいと思っています。ですからそれを済州島がどのように解釈して、行政的にあるいは姿勢的に。日本での限界が財政だったということなので、スローガンで終わるのではなくて、済州島がどのような代案と目的を持ってしていくかというのは今がはじまりと思います。私達の考えはこうだという結論を出すのではなくて、その出発のきっかけとなったらいいと私は思っています。」

パク・ギョンウン

「これは論議のはじめであるという、それぞれの立場で発展させていこうという話でした。」

イン・チホ

イン・チホ
Chi Ho IN

「このようないいプロジェクトを進めていらっしゃるバードハウスプロジェクトの芳野会長に敬意を表します。私は済州島の立場で、日本側との関係で、ホストの役割で展示し、限定された環境範囲で、見せるだけの役割だったら限界があると思います。パートナーの関係で、このような概念、プロジェクトを持続的につなげ、グローバルな価値を持って高めていくことが必要だと思います。芳野会長の発表で産業博覧会の例がありました。デザイナーや建築家が中心となってこの環境を破壊してきた主犯です。私は産業デザインを教える教授ですが、必要ではない作品をたくさん作って購買を要求するとかそれをまたゴミにしてしまう。それをしてきたのが建築家、産業デザイナーが環境破壊を進めてきた者達です。ですから彼らがもう一度環境の問題を考えてみなければいけないという点でこのバードハウスプロジェクトを考える必要があると思います。

私が偶然にコウリョウ大学の学生達と 3 年前から、実験的な部分でこのような課題を進めてきました。これは「シンデレラの復讐」という本にもされています。シンデレラの靴を持って自分の造形性などを発展させる作品があります。デザイナーや建築家が自分のデザインの哲学を見せる単純な課題ではなく、そこに深い意味があると思います。環境に対する覚醒や自らに対する反省など、これを通して多くの人に訴えようとするデザインのイッシュー（?）など、最近、デザインに関連する多くの動きがあります。どのような方向になっているかというと、デザイナーが富(?) を求め蓄積し、新しい文化を作り、美を追求するのではなくて、デザインを通して地球を生かし、第三世界の困っている人達を助けるというような主題、デザインのレターを通して、デザイナーが世界に関心を持って、疎外されている人達の為に何か仕事をするという方向性もあります。それを見てみる時にこれがグローバルに知らせる必要があると思います。多くの人に覚醒させる契機になると思います。そしてこのバードハウスプロジェクトもそのようなものになるのではないかと思います。そうなるとすれば、先程、会長とも話したのですけれども、ソウルや他の地域と済州のバードハウス財団が協力して巡回することもできると思います。例としてスイスは、スイスの政府の大使館にデザインの広報の諮問の役割をしました。スイスは 1800 年代から 100 年以上、400 以上のアイテムをコンパクトな木の箱（プライウッド）の中に 7 ～ 8 つを入れて各国に送っています。それを展示以降の内容に対しては、それを送られてきた国がそれを支援するシステムがあります。先ほどチョン作家が言われましたけれども、一つの地域がバードハウスを見せ、済州島のシンボルを作るのもいいのですけれども、済州島がパートナーシップを持ってグローバル化させることのできる世界的なイッシューを作ることのできるものとして進行していけば、大きな発展を見ることができるのではないかと思います。」

パク・ギョンウン

「イン・チホ教授は、チョン・ジョンチョルが作家が提示したものとは違うバードハウスプロジェクトの方向性を提示して下さいました。パートナーシップを持って、済州に寄贈された後に各国にそれを発信する方法もあるのではないか、という話でした。これに対してご意見をお願いします。」

チェ・ジョンソック

チェ・ジョンソック
Jong Seuck CHOI

「三人の先生の意見を聞きましたけれども、方法論としては今後検討する部分が多いと思います。バードハウスについて私が短い時間ですけれども聞いたところによると、現在、世界的に有名な作家が賛同しており、世界的にも各地域に事務局があると聞いています。バードハウスという小さな概念から出発しながら、宇宙デザインを進行しているとも聞いています。これまでの活動されていた内容に対して敬意を表したいと思います。とても素晴らしい仕事をされてきたと思います。今後これを済州島という地域的な特性や、済州島が持っている文化的な遺産とをつなぎ合わせて、済州島がバードハウスを発展させていくのはとてもいい事業だと思います。先ほども言われましたように、これが済州島に限られてはいけないと思います。世界的なネットワークを活用して、環境運動が拡散できるような契機となったらいいと思います。今後詳しい計画は立てる必要があると思います。それを誰が主体になって計画し管理していくのか、という点も重要な目標だと思います。

コン教授が言われましたけれども、事務局を中心として計画していくのがいいのではないか。長期的なマスタープランを立てる必要があると思いますし、これまで積み上げてきた日本のバードハウスプロジェクトのノウハウを段階的に受け入れて、昇華（消化?）することができる機会が必要だと思います。発展的な方向性を持って、それが歪曲されずに発展させることができればと思います。」

パク・ギョンウン

「今後の済州らしい方向性を持っていく必要があるという話でした。誰が計画して管理していくかというのも重要だと思います。今後、これまで進めてきた事務局と協議してこれまでのノウハウ、事実上、ノウハウが財産ですので、済州島との協約事業を通して一つずつ進行していけば、これが済州島のノウハウとなるだろうし、
このプロジェクトを持続していくことができるのではないかと思います。

局長の方からお願いします。」

キム・ヤンボ
Yang-Bo KIM

キム・ヤンボ

「とても貴重なお話をありがとうございます。基本的に我々がこのプロジェクトを日本側と共にしていくにあたって、その方向性は「済州は地球の縮小版だ」という概念を持っています。そのような意味で済州とバードハウスという概念が共通していると思っています。そして「きっかけを作ろう」という部分に対しては、そのきっかけがどうであるとしても、グローバルであったとしても、それは共通していますので、実務的な次元から申し上げますと、「済州は地球の縮小版だ」と思った時に、その方法をどうするのかという点から考えると、地球を保全する方法は、水質の汚染を予防する、ゴミを減らす、という方法です。

最近は環境の保全が自然の保護というところまで行っています。未来に進む出発点が地球環境を保全するというところに、芸術・文化なども融合させることができると思います。その拡大性をどのようにするかという方法論において、世界的な流れもありますし、その流れの中で済州がそれをリードするような役割をバードハウスプロジェクトを通してできるのではないかと思います。それがバードハウスプロジェクトを私達が受け入れた理由でもあります。事務局の話もありましたけれども、行政がまずそれを知ることによって、島内や島外の専門家を招いて、意見を聞いて、理解を深めるという意味で、今回、このような専門家セミナーを行いました。発表の内容を今日聞く中で、提案できる案をまとめてみました。世界の人達が共に作るバードハウス作品を作りたいというのが一つめの提案です。世界の人達が共に作るというのは、専門家だけではなく、平等な観点から多様な人達が参加できるように。それが 1 年、5 年、10 年かかるかもしれませんけれども、そのような作品を作りたいと思います。世界の人々の心に刻まれる作品も可能ではないかと思います。ICC などもありますので、世界中の人が済州島に訪れています。それも可能ではないかと思います。二つめの提案は、作品の観点ではなくて、一般の人達の観点からアプローチできるもの。これまでの地球環境保全のために努力した人が作った後に残っている本でもいいし作品でもいいし、そのようなものを集める場所。その作家達が亡くなっていたとしても、彼らの作品を通した精神はバードハウスプロジェクトの精神と共通点があると思います。バードハウスプロジェクトから拡大して、プラスアルファの概念ですが、そのようなものを集めることも必要だと思います。もう一つは、日本でも作家が多いですし、世界でも活躍していますが、韓国、中国の作家達がバードハウスプロジェクトの中にいませんので、限界性を持っていると思います。日本、韓国、中国の政治的な葛藤がありますので、地球を保全するという地球的な観点から、その共通点を見出して、共にできる作家が寄贈したり、作品の展示をするとか、中国の山ですするとか、済州という限界を超えて、環境を超えた平和に帰結する拡大性を持っているのではないかと思います。行政が主体ではなくて、行政は支援の役割をしようという観点から、これを申し上げたいと思います。」

パク・ギョンウン

「この事業の主催者である環境保全局長キム・ヤンボ氏からの提案でした。三つの提案がありました。済州を訪れる人が参加するバードハウスの事業、一般人の作家を集める事業、韓国・中国など東アジアの作家が参加できる事業についてのお話でした。局長が話されたということで、ここには財政の支援もあるのではないかと思います。可能性のある話ではないかと思います。実質的に物理的に実践できる内容ではないかと思います。

日本のパネラーの先生方、ご意見をお願いしたいと思います。
提案などありましたらお願い致します。

キン・バンウン副知事

パク・ソンウン先生の方から本質的なバードハウスプロジェクトを理解することが重要だと思いますし、ではどうすべきかという問題については、いい意見がありました。この考えに対する疑問に対する答えのまとめができたわけではありませんが、局長が先ほど言われた内容とも一致しているところもありました。コウリョウ大学のイン・チホ教授の話にもその答えがあると思います。チョン・ジョンチョル作家の話の中にも答えがあると思います。私が考える時、日本でこれまでしてきたプロジェクトの感じはオブジェクトを見る態度だったと思います。済州の立場ではそのようにして問題を解決するという方法は少し合わないのではないかというふうに私は考えています。

拡張性、拡大性の問題が今後重要な問題になると思います。オリジナリティをどのようにして作っていくかということで、これまでは専門家がこのプロジェクトに参加して、専門家が意識的な警戒心を社会的に喚起したとするならば、産業という意味を強化して、一般人が参加して、それによって教育を受ける、教育されるというのが本質的な問題だと思います。このプロジェクトを受け入れて、我々が推進するとしたら、その段階に引き上げることが重要だと思います。さらにより有名な作家を迎えるというよりも、日本でこれまでしてきたコンセプトでその意味は十分であったので、日本では一般人を対象にした教育とか参加の問題に拡大していくのが望ましいのではないかと思います。先程、イン・チホ教授が、スイスの箱の例を挙げて下さいましたけれども、ミラノに何か箱に入れて送るという、ミラノのバードハウスプロジェクトを有名な作家が参加するのではなくて、一般人の考えをそこに込めることができるような拡大性を持っていけば、済州という環境は一つのバードハウス、済州がバードハウスだという考えから、それが財団だという考えを持って運営していくという考えから、そこにオリジナリティを含めて、日本の内容を少し違う角度からそれを拡大していく必要があるのではないかと思います。今日、重要な提案がされましたが、イン・チホ教授が提供された内容を考えて具体的に進めていくことも重要だと思います。日本でこれまでされてきた内容は有名な作家の参加を通して大衆に警戒心を喚起する作業だったとすれば、パク・ソンウン教授の提案は大衆の領域に参加の幅を広げて、それを通して、世界とも連携する済州島がバードハウスだという概念で全世界に大衆が参加することができる機会を与えるプロジェクトとして拡大していくのがいいのではないかという提案でした。これは事務局レベルで研究していく課題だと思います。人が集まってこのようにして討論するというのは重要ですよね。今日、とてもいい討議ができたと思います。私は座長の立場にいますので、ここにいると人が委縮してしまうのですけれども、まとめてみましょう。全体的な話は、日本で始まったバードハウスプロジェクトが済州につながるというのはとてもいいことだ、というふうな共通概念を持っています。日本では民間のレベルで行ってきました。非営利団体でしたので、限界がありました。済州島では行政がそこに加わって、さらに運営の確実性を高めようということでした。その中で、パク・ソンウン教授が言われた内容は確認して進める必要があると思います。済州島はオニリョン行政で環境と生命の共存というテーマを掲げていますけれども、済州島は 50 年前にはそれ自体が宝物でした。それを人間が開発したりして、それを破壊してきました。産業社会がそのようにしたのですけれども、このような状況で済州島も正常な価値を認められ、ユネスコからの保存の登録もありますので、その段階に入っています。その中で今その動静は環境の保存などを掲げているのですけれども、その中にあってこのバードハウスが受け入れられながら、バードハウスの哲学のレベルまで、まだ済州島が成熟していないのではないかという自省の声もありました。これを推進する中で、済州島における哲学的な疑問は何なのかというのを討論しながら、このプロジェクトが持っている本来の意味を失わずに、世界に発信することのできるプロジェクトとして拡大していくことが重要だ、ということでした。今日の討論を通して、局長がいいお話をして下さいました。具体的に事業に携わる人達が論議し、これを整えて、今日提示されたいくつかが具現化されることを願いたいと思います。今日、芳野先生をはじめとする先生方、ありがとうございました。このプロジェクトが済州島で花咲くことができることを望みながら終わりたいと思います。ありがとうございました。」

以上